

バビロニア人のシュメール語研究について

—その 2—

吉 川 守

<はじめに>

シュメール語研究の当面の課題の一つとして、筆者はバビロニア人の手に成るシュメール語研究資料の言語学的ないしは文献学的な批判を意図し、すでに Syllabary (シュメール・アッカド辞典) および文法テキストについて、一端ながら、その攻究を進めてきたのであるが、本稿ではいちおう対象を変えて、宗教・文学関係の対訳資料 (Bilingual texts) に顕れたバビロニア人の錯誤を通して、特にシュメール語の文法構造に対するその理解の程度を批判して見たいと思う。

イシン・ラルサ王朝以後のいわゆる 後期シュメール語 (Nachsumerisch) 資料の中でも、特にこの種の対訳テキストには、伝承過程中に於ける脱字、衍字、誤字などの過誤を慮外視するとしても、なお色々な点で多くの問題が含まれていて、そのままではシュメール語資料として使用することに躊躇逡巡せざるを得ない。

シュメール学の当初より、この種対訳資料は、比較的読解の容易なテキストとして広汎な活用をみたのであるが、その近接態度には、なんといっても批判面にもっとも欠けるところがあつたように思われる。

バビロニア人の文法テキストに対すると同様、このような対訳テキストのシュメール語に対しても、可成りの信頼を託しているように思える点や、また研究初期の傾向として、シュメール語よりもバビロニア訳を重視している点などにも、そのような欠陥が指摘されうるだろう。たとえば、次の例：

CT. XVI, pl. 6, Col. v.

237) 14 tu₆-tu₆-Eridu^{ki}-ga-ke₄ mu-un-ud-da me-en

238) a-ši-pu šá ina eri₄-du₁₀ ib-ba-nu-ú a-na-ku

に於いて、A. DEIMEL 教授は ud-da (=banū) なるシュメール語の動詞が存在したのもとして Sumerisches Lexikon (§381, 313) に採録されたのであるが、この ud(-da) なる動詞語根の存在は非常に疑わしい。ud(-da) は意味の上からも、語形からも明らかに tu(d), tu-d(a), tu-ud(-da)=banū と対比さるべき語で、(ダイメル教授の立場からすれば、) ud(-da) は tud(-da) の語頭子音 t の脱落した語形と看做されると考えられるが、本例以外にこの語形は在証されないし、ŠL. にも本例の他に引証はない。また出土 Syllabary のいずれにも ud=banū の解義は見出されないのであるから、類似文脈に於ける用例 (passim: e. g. CT. XVI, pl. 12, 22; pl. 44, 82/84; pl. 45, 132 etc.) を挙証するまでもなく、この例は mu-un-tu-ud-da に於ける -tu- の単なる脱字と解釈するのが妥当であろう。

またダイメル教授は ŠL., 371, 88, g) に於いて、CT. XVII, pl. 29, 5/6 を

- 5) nam-tar dingir edin-na-ge-dim₂ ni-gid₂-gid₂
 6) šá ina ši-rim ki-ma za-ki-ki it-ta-na-aš₂-ra-bi-tu
 ((der in der Wüste wie der Wind daherfegd.))

と翻字、翻訳されたのであるが、この例では文意をシュメール語よりも、むしろセム語訳に拠って訳出しようとした在来の傾向の欠点が期せずして露呈しているように思われる。

上例で、シュメール語の dingir ((神)) に当たる語詞はアッシリア訳及び教授の訳文中には見当たらず、この文字が完全に浮いてしまっているのに反し、訳文中に見える ((der Wind)) に照応する語はアッシリア訳 (za-ki-ku) にあって、シュメール語文中には見出されない。つまりこのようにシュメール語が訳文から遊離してしまったのは、この例文がアッシリア語をもとにして翻訳されたことに起因していると考えられる。もちろん、ここの dingir は an と読み、次の edin-na に係けて an-edin-na (=an-na-edin-na, CT. XVII, 19, 1/2) と翻字されるべきであり、教授が属格語尾のように転写された -ge- も、lil ((風)) と読まれなければならないことは言うまでもない。

註) lil を -ge- (正しくは -gé-) と読んだ場合には“風”(šāru) の意味はなく、別の意味 (hītu) を持つことになる。

また Verbal complex 中に見える gid₂-gid₂ についても、下例：

CT. XVI, pl. 1, 36/37.

36) líl-lá edin-na ì-bú-bú-eš-àm

37) *li-lu-ù šá ina še-rim il-la-na-aš-šar-be-tu*

の比較から容易に察知される如く, -bú-bú- は -bu-bu- に対する単なる音声表記に過ぎないことは明白であるから (註参照), GÍD-GÍD が -bu-bu と読まれなければならないことは疑問の余地がない。つまり前例は全体として次のように理解されなければならない。

nam-tar an-edin-na líl-gim ì-bu-bu

((荒野を嵐の如く, 吹きすさむ死魔))

註) 後例中の -bú(-bú) に gid の音価はないから, 前例中の -bu(-bu) が gid と読まれた可能性はなく, -bú の他の音価 (kaskal, káš) には ((吹く, 吹きすさむ)) に類する意味はない。もちろん gid にも ((吹く)) の意味は知られていない。

I

公刊されている対訳資料の中から, 本稿では特に CT. (Cuneiform Texts in the British Museum, London) の Part XVI (50 plates) 及び Part XVII (50 plates) を批判の対象として選んで見た。この 100 plates に集録されている対訳テキストの検討から得られた結論が, この時期の他の対訳資料に拡張解釈出来るかどうかは興味深い問題であるが, 後考を待たねばならない。また同じく後期シュメール語に属するもので, 対訳を伴わないシュメール語のみの宗教・文学テキストとの関係についてもまだ確言することは出来ない。

さて, CT. XVI の 50 plates (=138 clay tablets および fragments) と CT. XVII の pl. 46-49 は, いわゆる Udug-hul-a-meš *Utukki Limnūti* ((The Evil Spirits)) として一つのシリーズを成し, 原初的には少くとも十六章から構成されていたと推定されている。このうちの残存する断章で奥書からその所属を明らかになしうるものは, 第三, 四, 五, 十, 十五, 十六の六章である。これらの各断章及び所属不明の断章は, 用いられている楔形文字, 特に KA, SI, GA, RU, LÚ, HA その他の字形から, 明白にバビロニア系 (Tablet 3; [4]; 15; A; H; I) とアッシリア系 (Tablet 5; 10; 16; B; C; D; E; F; G etc.) とに類別することが出来るが, このような対立が, 伝承とどのような関連を有しているかは, 今の筆者には不明である。

CT. XVII (=99 clay tablets および fragments) の pl. 1-28 は á-sig-gig-ga-meš *Ašakki*

Marsūti ((The Fever Sickness)) 及び *sag-gig-ga Ti'i* ((Headaches)) シリーズの諸泥章であり、前者は少なくとも十二章、後者は少なくとも九章で構成されていたものと推定されるが、前者の現存する章としては、第一、三、九、十一、十二の五章、後者では第三、六、八、九の四断章が確認されているに過ぎない。

これら三シリーズについての完訳はまだ行われていないようであるし、また翻字にも接していないが、部分的な翻訳(及び研究)は、B. MEISSNER, *Babylonien und Assyrien II* (第十七章); R. C. THOMPSON, *Semitic Magic*, 1908; H. A. BRONGERS, *De literatuur der Babyloniers en Assyriërs*; H. W. M. DE JONG, *Demonische Ziekten in Babylon en Bijbel*, 1959 その他に紹介されている。そして未見の書ながら、恐らく R. C. THOMPSON, *The devils and evil spirits of Babylonia*; A. UNGNAD, *Religion der Babylonier und Assyrier*; O. WEBER, *Dämonenbeschwörung bei den Babyloniern und Assyriern* などにはより豊富な紹介が見られるかも知れない。

II

古典期のシュメール語(Altsumerisch→Neusumerisch)と異なる用例をもって直ちに誤用と断定出来ないことは言うまでもないが、それかと言ってその用例が、シュメール語の正常な発展の結果として認定出来ない場合が存在することも否定出来ない。

たとえば、下に示すものはバビロニア人の伝えるシュメール語に誤用の認められる一例であるが、この場合では前後の文脈から、このテキストに於いて誤用の生じた理由を可成り明瞭に窺い知ることが出来る：

1) CT. XVI, pl. 7 (=Tablet 3, Col. 6=No. 38594, K. 224 etc.).

- 262) m̄a-e lútu₆-tu₆ èri-zu
 263) ana-ku a-ši-pu arad-ka
 264) á-zì-da-mu-šè gin-na-ab á-gub-bu-mu-šè dah-ab
 265) ina im-ni-ia a-lik ina šu-me-li-ia ia ru-uš
 266) tu₆-mu tu₆-kù-ga-zu gar-ra-ab
 267) ta-a-ka el-lu ana te-e-a šu-kun
 368) ka-mu ka-kù-ga-zu gar-ra-ab
 269) pi-i-ka ellu ana pi-ia šu-kun
 270) du₁₁-kù-ga-mu sig₅-ga-ab

- 271) *a-ma-lum ellitimtm dum-mi-ik*
 272) *ka-ta-du₁₁-ga-mu hē-en-silim-ma-ab*
 273) *ḫi-bit pi-ia šul-lim*
 274) *me-mu sikil-e-dè du₁₁-ga-ab*
 275) *par-ši-ia ul-lu-lu ḫi-bi*
 276) *ki-gìr-gin-na-mu ga-an-si-il*
 277) *e-ma al-la-ku lu-uš-lim*
 278) *lú-šū-tag-ga-mu hē-en-silim-ma-ab*
 279) *amēlu a-laḫ-pa-tu gam-lim*

- 262) “——余は、悪魔祓い人なり、汝の下僕なり。
 264) 余の右側を歩き給え。余の左側にて助け給え。
 266) 汝の聖なる呪禁を、余の呪禁となし給え。
 268) 汝の聖なる口を、余の口となし給え。
 270) 余の浄き言葉を、いつくしみ給え。
 272) 余の口より告げられし言葉を恵ませ給え。
 274) 余の儀式を浄めんために、語らせ給え。
 276) 余の歩まんところを、恵ませ給え。
 278) 余が手もて触れん人を、いつくしみ給え。——”

上例中、265) の *ina šu-me-li-ia* と *ru-uš* の間に見える *ia* は衍字。šullim はもちろん šalāmu の Piel 語幹に対する命令形。271) の *ellitimtm* は Duplicate K. 224 では *el-li-ta* と記されている。このように、バビロニア語の格語尾の表記は正確でない場合が多い。

さて、シュメール語では命令の表現に三種の方法が用いられたが、上例ではそのうち二つの方法が使用されている。その一つは〈動詞語根を (Verbal complex の) 前へ出し、それに続けて接尾辞 -a, -an, -ab (etc.) を添加する方法〉であり、上例では gin-(na-) ab, dah-ab, gar-(ra-)ab, sig₅(-ga)ab, dug₄(-ga)-ab がこの命令法に当たる。第二の方法は一般に Optative または Precative と呼称されるが、命令表現にも用いられ〈一人称に対しては Preformative ga-, 二, 三人称に対しては Preformative *hē- を前置することによって表わされた。〉ただ、一人称単数の場合には Verbal suffix は常に零で表わされ、*hē- は後続する母音との諧調により、h_a-, h_i-, h_é-, h_u- として表記されることがある。

第二の Optative による命令法は、動詞語根前置による第一の命令法とは異なり、Suffix *-a/-an/-ab* が添加されることは、古典期のシュメール語（初期王朝期—ウル第三王朝期）を通じて行われていないし、またイシン・ラルサ王朝期以後のいわゆる後期シュメール語についても、筆者の精査した所では本例以外には在証されない。従って上例の *hé-en-silim-ma-ab* の場合には、形態上、正規の *hé-en-silim(-me)* と第一の、*-ab* 接尾による命令法との混成という形をとっているのであるが、この形式をそのまま当時実際に行われていた命令表現の新形式と看做すことには躊躇せざるを得ない。本例に続いて記されている命令形で正しくはそれぞれ *hé-en-du_{II}(-ge)*, *hé-en-tum(-me)*, *hé-en-si-il(-le)*, *ga-si-il* と表記されるべき *hé-en-du_{II}-ga* (280), *hé-en-tum-ma* (292), *hé-en-si-il-lá* (294), *ga-si-il-lá* (296) が、*-e* ではなく *-a* をもって接尾されている事実と、*hé-en-silim(-ma-ab)* の前後に第一の命令法 *-ab* の附加による命令形が用いられている状況から考えて、恐らく類推によってこのような過誤が犯されたものと推断される。

276) の *ga-an-si-il* の *ga-* も恐らく誤用であろう。前後の Context から考えて、この個所で一人称に対する Preformative *ga-* を用いること（“余の歩まん所を、余は恵もう”）は適当でない。この場合は、*ga-* の用法に詳しくないバビロニア人が文体的 Variation に意を用い過ぎたために犯した誤ちと考えられる。

類推による誤りは次の例においては、なお一層明白であろう：

2) CT. XVII, pl. 34 (=Tablet “V”).

- 35) *zi-dingir-gal-gal-e-ne-ke₄ ní ba-ra-nu-tuk-a*
 36) *šá niš ilâni^{meš} rabûtim^{meš} la i-pal-la-ġu*
 37) *zi-dingir-gal-gal-e-ne-ke₄ sa hé-en-dù*
 38) *niš ilâni^{meš} rabûtim^{meš} li-ik-su-šú*
 39) *dingir-gal-gal-e-ne-ke₄ nam-ġa-ba-ra-tar-ru-da*
 40) *ilâni^{meš} rabûtim^{meš} li-ru-ru-šú*

註) *sa hé-en-dù* に含まれる Compound verb *sa~dù* は言うまでもなく、*sá~du_{II}=hašâdu* に対する音声表記(当字)である。またこの語のセム語訳 *li-ik-su-su* はもちろん *li-ik-šu-ud-šu* に由来するもので *-dš->-s-* の移行は *ġak-ġa-su* (<*ġakġudsu* “彼の頭”, CT. XVII, pl. 26, 72 etc.) などからも証される。従って *li-ik-su-su* の表記法も正しくは *li-ik-šu-su* が期待されるところである。

35), 37) 行では *zi* (元来の意味は“命”) と *dingir-gal-gal-e-ne* ((偉大なる神々)) との間に関格関係が存するため $-k(e_4)$ が使用されているのであるが, 39) 行では先行語 *zi* が無くて, その関格関係が消失しているにも拘らず $-k(e_4)$ が用いられている。この場合 *zi* の脱字を想定することも出来るが, セム語訳にも *niš* が書写されていないので, むしろ類推による $-ke_4$ の衍字を考えるのが当を得ているであろう。

また上例中, 35) 行目の *ní ba-ra-nu-tuk-a* について, *ní~tuk* は Compound verb として, *ní~te* (= *palâhu* “fürchten”) と同義に用いられているのであるが, 問題になるのは, 禁止 (Prohibitive) を表わす Preformative *ba-ra-* と否定 (Negative) を示す Preformative *nu-* との重複である。このような重複はシュメール語では許容されないから, *ba-ra-* (= Variant. 93082: *bar-ra-*) を Verbal prefix *ba-* と infix *-ra-* とに分析理解するとしても, 当然この例は *ní nu-ba-ra-tuk-a* (> *ní la-ba-ra-tuk-a*) と表記されなければならない。従っていずれにしても, このシュメール語の用い方にはバビロニア人による誤用を認めなければならない。この誤用は恐らく禁止の Preformative *bara-* に否定が含まれていることを知らないか, もしくは *bara-* を知らない書記によって犯されたものであろう。

叙上の如き類推 (その他) による誤謬の他に多いバビロニア人の誤用は, なんとと言っても Compound verb に於ける先行名詞の扱い方と属格接尾辞の使用法において特に著しい。以下順を追ってその例を示して見よう :

3) i, CT. XVII, pl. 1, 36/37.

36) ^dDam-gal-nun-na *h₃e-en-si-sá[-e ?]*

37) ^uDam-ki-na *liš-te-šir*

ii, CT. XVII, pl. 21, 94/95.

94) ^dDam-gal-nun-na *si h₃e-en-si-sá-e*

95) ^uDam-ki-na *liš-te-šir*

iii, CT. XVII, pl. 26, 82/83.

82) ^dDam-gal-nun-na *si h₃e-en-si-sá-e*

83) ^uDam-ki-na *liš-te-šir*

註) *liš-te-šir* は *išēru* ((*gerade, recht, richtig sein/machen u. s. w.*)) の *Ištafal* 語幹に対する Precative。なお *Assyrian Dictionary*, vol. 4, p. 353 左欄, 上段参照。

この三例に於いて, Compound verb *si~sá* の用い方がいずれも間違っていることは, 正しい用例を改めて引証するまでもない。当然この用例は, 三例とも次のように表記されなければならないものである:

iv, ^dDam-gal-nun-na si hé-en-sá-e.

ii, iii の二例は明らかに, i の誤例と iv の正しい例との混合から起ったものと考えられるが, i の誤用が生じた原因は色々に想定することが出来るので断定は出来ない。

複合動詞に対するバビロニア人のこのような理解力の不足は次の二例に於いても窺知することが出来る:

4) CT. XVII, pl. 26, 80/81.

80) inim-^dEn-ki-ke₄ pa-è hé-[]

81) a-mat ^ùE-a liš-te-pi

この用例も正しくは pa hé(-en)-è-[] と書かれなければならないことは言うまでもない。なお *lišlepi* は *šupû* ((*erstrahlen; hervortreten lassen*)) の *Iftaal* 語幹に対する Precative である。

5) CT. XVI, pl. 9, 42/43.

42) sag-giš kalam-ma mu-un-ra-ra-e-ne

43) šá ma-a-tam i-nar-rù []-šú-nu

この例で, sag-giš~ra(-ra) ((*殺す<頭を一本で一打つ*)) は複合動詞であり, 副詞は前置名詞 (sag-giš) に続けて置かれることは許されるのであるが, 本例のように目的語である名詞がこの位置にくることは違例である。この例も正しくは kalam(-ma) sag-giš mu-un-ra-ra-e-ne と書かれなければならないだろう。(少なくとも文体的意図を察知することは出来ないように思える。)

他に多いバビロニア人の誤用は, Nominal suffix, 就中 Genitive suffix の使用に於いて認められる:

6) **i**, CT. XVI, pl. 20, 118/119.

118) d En-ki engur-ra šu-a [ba]-an-na-an-gi

119) ana i .É-a ina ap-si-i šu-un-ni-šum-ma

ii, CT. XVII, pl. 38(=Tablet „AA”).

7) a-a-ni d En-ki-ra engur-ra-ke₄ šu-a ba-an-na-gi

8) a-na i .É-a a-bi-šú ina ap-si-i ú-šá-an-na

iii, CT. XVI, pl. 20, 122/123.

122) d En-ki-ke₄ engur-ra-ke₄ gir-pab-hal-la mu-un-gin

123) ana i .É-a ina ap-si-i pu-ri-du il-lík

iv, *ibid.*, 128/129.

128) d En-ki-ka-ke₄ engur-ra-ke₄ inim-bi giš bí-in-tuk

129) i .É-a ina ap-si-i a-ma-tam šu-a-tu iš-me-ma

v, CT. XVII, pl. 34.

9) dingir lú-ba-ke₄ nam-mu-un-da-an-búr-ra

10) ilu u amêtu la ip-pa-áš-šá-ru

註) **i**, **ii** に見える $gi=šánu$ ((sich ändern; erzählen u. s. w.)). **iii** の $pu-ri-du$ =(Bein, Eilbote)). **v** の $búr=pašáru$ ((solvere)).

すでに叙べたように、Nominal suffix $-ke_4$ は Genitive suffix $-k-$ と Nominative (–accusative) suffix $-e$ とを併せ含むのであるが、**iii** 及び **iv** から窺知される如く、バビロニア人は Genitive element $-k-$ を全く無視して、単なる Nominative (–accusative) suffix ($-e$) と等しく用いていることがわかる。また被修飾語と修飾語の両語に $-ke_4$ を用いている誤謬は、多分セム語に於ける用法の類推から生じた誤用と看做すことが出来るかも知れない。下の例は前者の場合に相当する：

vi, CT. XVI, pl. 9, II, 6/7.

- 6) gîr kur-ra-ke₄ nu-mu-[]
 7) še-e-pu ana mâtim^{tim} u[l-]

上掲の諸例のうち, **i, ii, iii** は :

§ ^dEn-ki-engur(*-ra-k)-ra~

と訂正されなければならないし, **iv** も :

§ ^dEn-ki-engur-ra-ke₄~

と改められねばならぬのは言を俟たない。しかしながら次に示すような -ke₄ の誤用はバビロニア人のいかなる解釈に起因するのか判然としない :

vii, CT. XVII, pl. 21, 92/93.

92) inim-^dEn-ki-ke₄ pa-ḫé-è-a-ke₄

93) a-mat ^u·É-a liš-te-pi

他の Nominal suffix についての誤用の例を一, 二示して見よう :

7) CT. XVI, pl. 11, Col. VI, 27-30.

27) šà-uru-a-ta nam-mu-un-da-nigin-e-dè

28) ina libbi^{bi} âli la tal-ta-nam-mi-šú

29) bar-ta-bi-šè nam-mu-un-da-nigin-e-dè

30) ina a-ḫa-a-ti la ta-ša-na-aḫ-ḫar-šú

註) *taltanammišu* は *lamû* ((umgeben u. s. w.)) の Iftaneal, 同じく *tašanahḫaršu* も *sahârû* ((sich wenden u. s. w.)) の Iftaneal。

上例で šà-uru-a-ta (正しくは šà-uru-ta “町の中で”) の誤用は許せるとしても, bar-ta-bi-šè についての誤謬は看過することが出来ない。シュメール語では Nominal suffix (-ta, -da, šè etc.) に続けて -a/-àm 以外の文法要素を添加することは許されないから, もしその必要がある場合には -ta の前に出さなければならない(e. g. SL., 74, 279 : bar-bi-ta=*ina a-ḫa-a-ti*, Br., 1903 etc.)。しかしその場合には, -ta ((……から, ……で)) と -šè ((……へ, ……で)) とが重複して矛盾をきたすことになる。従ってこ

の誤用は恐らく、次の三種の表現の伝承過程中に於ける混同に起因するものと思われる：

$$\left. \begin{array}{l} \text{bar-bi-ta} \\ \text{bar-bi-šè} \\ \text{bar-ta} \end{array} \right\} \text{bar-ta-bi-šè.}$$

同様な -ta の誤用は下例の場合に於いても指摘される：

8) CT. XVI, pl. 20 (cf. ib. pl. 21, 148/149 : na-an-na-ri).

73) dub-sag-ta u₄-sar d⁴·Sin-na šúr-bi ba-an-dib-bé-eš

74) *ina mahar nannar-ri* u⁴·Sin iz-zi-iš il-ta-nam-mu-u

((ナンナル神とシン神の前で、彼等は怒って歩き廻る。))

この例に於ける -ta の如き用法にシュメール語の膠着語としての特徴が非常によく具現されるのであるが、バビロニア人の書記の中にはそのような用法に習熟していない人が可成りいたものと思われる。上例も正しくは：

§ dub-sag u₄-sar d⁴·Sin-na-ta~

と表記されていなければならないのは勿論である。この誤用もセム語の類推によるものと考えられる。

次に示す諸例においても、そのようなシュメール語の性格が十分に把握されていたようには思われない(各例中の en-na の位置を比較検討して見ると興味が深い)。

9) i, CT. XVI, pl. 11, 54-60.

54) [su-l]ú-ulù^{1a} dumu-dingir-ra-na

55) [] zu-mur amêli mâr ili-šú

56) [en-na ba-ra-an]-ta-re-en-na-aš en-na ba-ra-an-ta-

57) [zi]-ga-en-na-aš

58) [a-di la ta-]as-su-ú a-di la ta-as-su-ḫu

59) [ú ba-ra-an-d]a-ab-kú-e a ba-ra-an-da-ab-nag-e

60) [a-ka-la] e ta-kul me-e e tal-ti

ii, CT. XVI, pl. 13, 55-57.

55) lú-ulù^{1a} dumu-dingir-ra-na

56) en-na ba-ra-an-ta-ri-in-na-aš
en-na ba-ra-an-ta-zi-ga-en-na-aš

57) ú ba-ra-an-da-ab-kú-e a ba-ra-an-da-ab-nag-e

iii, CT. XVI, pl. 14, 37/38.

37) en-na su-lú-ulù¹⁴ dumu-dingir-ra-na

38) ú ba-ra-an-da-ab-kú-e a ba-ra-an-da-ab-nag-e

iv, CT. XVI, pl. 34, 221-223.

221) en-na su-lú-ulù¹⁴ dumu-dingir-ra-na

222) en-na ba-ra-an-ta-ri-en-na ba-ra-an-zi-ga-en-na-aš

223) ú ba-ra-an-da-ab-kú-e a ba-ra-an-da-ab-nag-e

この例文には、A. POEBEL (*Sumerische Studien*, p. 14) 及び B. MEISSNER (*Babylonien und Assyrien*, p. (216-) 217) の訳があり、en-na に対する訳語の位置が面白い：

A. POEBEL,

“(aus) diesem Menschen, dem Kind seines Gottes, solange du nicht aus ihm entweichst, solange du nicht aus ihm dich entfernst, wirst du nicht bei ihm Speise essen, wirst du nicht bei ihm Wasser trinken.”

B. MEISSNER,

“Bevor Du Dich vom Leibe des Menschen, des Sohnes seines Gottes, nicht entfernst und Dich erhebst, sollst Du Speise nicht essen, Wasser nicht trinken.”

上掲四例中、iii (CT. XVI, pl. 14) では一行省略されているが、これらの四例はすべて同一内容の文を表現したものと着做して差支えない。pl. 13, pl. 14, pl. 34 でセム語訳が省略されているのも恐らくそのためかと思われる。この四例でわれわれの興味を惹くのは、すでに述べたように、en-na (=a-di “bevor”) の置かれている位置がそれぞれに皆異っている点である。このような差異性を文体的ないしは修辞学的考慮の払われた結果として理解することも可能ではあるが、しかし今までに述べてきたバビロニア人の Compound verb の取扱いや -ke₄ 及び他の Nominal suffix に対する理解の程度から判断して、この場合でも、シュメール語の接統詞の特殊な語法に充分習熟していなかったためと見る方がより妥当であるように思われる。

dumu-dingir-ra-na 中の指示代名詞 -na は *ni-a の Contraction に由来し、こ

の -a は文法的には次行の ba-ra-an-ta-ri-en-na 及び ba-ra-an-ta-zi-ga-en-na-aš の -ta- に照応するわけであるから, dumu-dingir-ra と同格である (su-)lú-ulù^{1a} と ba-ra-an-ta-zi-ga-en-na-aš との間には en-na の介在を認容し得る断絶が存在しない。つまりシュメール語の性格から云って, 上掲四例は次の如く表現されねばならぬ:

§ en-na su-lú-ulù^{1a} dumu-dingir-ra-na ba-ra-an-ta-ri-en-na ba-ra-an-ta-zi-ga-en-na-aš ú ba-ra-an-da-ab-kú-e a ba-ra-an-da-ab-nag-e

もし, pl. 13 の en-na の用法が正しいとするならば, pl. 14, pl. 34 に見える en-na の用い方が理解出来ない。従って恐らく Original では en-na su-lú-ulù^{1a}~ と表現されていたものが, 伝承(あるいは伝誦)の過程中にバビロニア人によって en-na ba-ra-an-ta-ri-in-na-aš etc. の形式に誤って伝えられたものと推定される。その正, 誤両形の併存する例が pl. 34 と考えれば, 前掲四例の存在が合理的に理解出来るようである。

III

上に述べてきたような誤謬はすべての泥章に平均して認められるというのではなくて, 特にある種の泥章に集中的に見受けられる傾向も否定しがたい。従ってバビロニアあるいはアッシリアのシュメール学者がことごとく, シュメール語の特殊な文法構造について正確な知識を有していなかったなどと結論しえないのは言う迄もない。次に示す泥章などは非常に小さい断片ながら, 可成りの問題を含んでいるのである:

10) CT. XVII, pl. 41 (=Tablet "C").

5) an nu-zu-meš ki-a nu-zu-meš

6) ina šamê^e ul it-ta-du-u ina eršetim^{t^{im}} ul il-lam-mad

7) gub-ba nu-un-nu-zu-meš DURUN nu-un-nu-zu-meš

8) ú-zu-uz-zu ul i-du-u a-šab-ba ul i-du-u

9) ú nu-un-da-ab-kú a NI MÚRUB-ab-nag

10) a-kal ul ik-kal mē^{meš} ul i-šat-tú

5) “——天に於いて, 彼等は知らず, 地に於いて彼等は知らない。

7) 立つことを彼等は知らず, 住むことを彼等は知らない。

9) 食物を彼等は食べず, 水を彼等は飲まない。——”

上例中五行目の an はバビロニア訳から見ても, 対照的に後続する ki-a に徴しても, an-na(=an-a) と表記されなければならないし, 九行目の Tense についても, バビロニア訳から推して -kú-e, -nag-e と補足しなければならない。また七行目の nu-un-

nu-zu-meš にしても否定辞 nu- の重複は他の資料では在証されないことで、恐らく本泥章のみに於ける誤用であろう。さらに九行目の a NI MÚRUB-ab-nag もこのままでは読解不能である。バビロニア訳では「水を飲まない」と訳出されているが、否定辞に対応するシュメール語が見当たらない。Context はかなり異なるけれども、下の例：

CT. XVI, pl. 24.

15) ú nu-un-da-ab-kú-e a nu-un-da-ab-nag-e (バビロニア訳なし)

と対比して見ても、当然この個処は、

§ a NI MÚRUB-ab-nag=a nu-un-da-ab-nag-e

の等式に於いて理解しなければならないだろう。従ってここで考えられることは、この MÚRUB が infix を意味する術語 múrub(-ta) として使用されており、先行する -un-da- の代用をなして、全体として ni-un-da-ab-nag と表わしたものと看做すことである。しかしこの解釈でも NI の用い方がいびつであることに変わりはない。

この同じ断片の一行目から四行目までの一部の語意が掴み得ないのも、恐らくなんらかの誤用が内包されているためかも知れない：

CT. XVI, pl. 24, 1-4.

- 1) én udug-ḥul a-la-ḥul gidim-ḥul te-lá-ḥul é-ki-kur-ta ti-a []-lá
- 2) ú-tuk-ku lim-nu (省略) ul-tu ir-ši-tù it-ta-ṣu-nu-šú-nu
- 3) KU(?)-kur-ti-ta šà-bi im-ti-a-meš
- 4) iš-tu KU-KÙ ana ki-rib eršetim^{um} it-ta-ṣu-nu-šú-nu.

—む す び—

以上、バビロニア人及びアッシリア人の伝える Bilingual texts について、その中に認められる間違ったシュメール語の用例を十例に絞って指摘して見たのであるが、すでに明らかな如く、シュメール語の特殊な構文についてのバビロニア人の知識には可成りの欠陥が内包されていることは、これを否定することが出来ない。しかしながら、対訳を伴っているために語意及び文意の決定が比較的容易であるこの種対訳資料の利用は今後とも不可欠であって、批判的な態度を堅持しつつ、シュメール語研究の確固たる足場を固めていくことが切に望まれるわけである。(1962, V, 4)

<補記> 前稿(本誌七号)の「むすび」で述べたバビロニア人の Verbal prefix in-, íb- についての見解の批判は神戸外大論叢第十二巻六号(p.75-91)に「シュメール語の Verbal infix -n-, -b- の単語法による解明(1)」として発表した。その続稿(2)は同誌第十三巻六号に発表の予定である。(筆者は神戸外国語大学講師)